



わが大地のうた

インド四部作

河野典生

部作

が大地のうた

河野典生

徳間書店

わが大地のうた インド四部作

昭和五十年十二月十日 第一刷

著者 © 河野典生

発行者 徳間康快

発行所 株式会社 徳間書店

郵便番号 一〇五
東京都港区新橋四の一〇
電話東京(四三)六三三(大代)
振替東京 四四三九二番

印刷 長苗印刷
製本 大口製本

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店でおとりかえいたします。)

目次

カルカタ・チヨウリンギー通り	5
デリー・コンノート広場	69
バラナシ・マラビヤ橋付近	129
カトマンズ・ダルバール広場	177

あとがき

カバ―写真 川人 忠幸
装幀 集合den

わが大地のうた——インド四部作

カルカッタ・チヨウリンギ一通り

匂がないな。

バラナシから、ほぼ一昼夜近い旅を終えて、夕暮のカルカッタ・ハウラー駅に降り立ったとき、高木はそう感じた。

高木は小説家だった。

民族音楽を材料とする小説を計画していて、この土地に関心を持っていた。とにかく実際に歩いてみよう。そう思い立ったのだ。

年末、三十日に高木はデリー空港に降りた。それから、ほぼ二週間が過ぎようとしていた。アグラ、ジャイプール、バラナシまでのさまざまな小村、ガヤ、ブッダガヤ、それらさまざまな土地を巡り、カルカッタはインドでの最後の都会だった。オールドデリー、バラナシの門前町、それら、人、牛、山羊、荷馬車、自動車、軽三輪、それらがごったがえしている場所では、汗や、排泄物や、ジャスミン香、ビャクダン香、ティカなど宗教用の顔料、安煙草ビディ、あらゆる匂いが鼻孔を襲って来た。そして、デリーやアグラ、バラナシなど都会地の駅では、ホームの大部分を埋めつくして、列車待ちをしている、うずくまり、毛布をかぶり、南京袋に潜った群衆から、それらの匂いの混合物が、ねっとりした異様な匂いとなつて吐き出されていたのだった。

人口八百万を越える、インド最大の都市にしては、いやにさっぱりした感じだな。

ホームにトランクを置き、ポーターの姿を探しながら、高木は思っていた。終着駅の、しかも

到着ホームのせいもあるかも知れないが……。ホームにたむろする群衆がいらないわけではなかった。だが彼らはどことなく小ざっぱりしていて、そこで談笑していたり、ポーター待ちの外
人観光客を、さりげなく観察したりしていた。

服装のせいもあるな。

高木は思った。牛馬を運ぶ車輛に等しい三等車や、簡単なベンチの二等車を埋めつくしていた、巻いた毛布や、寝具兼用のボロボロをまとった連中は、すでに流れ出て行った後だったので、ホームにいたのは寝台車兼用の一等客のほか、おそらく勤め人らしいカルカタ市民が、ほとんどだった。

彼らは地味な色彩のカッター・シャツや、カーディガン姿だった。

「OLらしいのは、いないですね」

耳元で日本語がきこえ、高木は振り返った。

「やあ」

「もつとも、女にまで進出されたんじゃ、インドの就職難はますますひどくなるってわけかな？」
話しかけて来た彼は、短く笑い、眼鏡の底の目を細めて、いくらか長い頭髪をかきあげた。

田島という名の二十七、八の土木技師だった。永い列車の旅の途中、ホームに降り立ったところを高木は彼に呼びかけられ、彼のいるコンパートメントで開帳されていたポーカーに加わってやった。

彼は十数人の観光団の一員でインドにやって来たのだが、そのうち八割ちかくが若いOLたち

だった。だから波長が合わなくて困ってるんだ、そんなことを言って笑っていた。

女護ヶ島の気分じゃないのか？

高木はそうだったのだが。

「百姓とか物売り以外、働いてる女を見たのは、インド航空のステュワーデス、インド舞踊の踊り手くらいですからね。もっとも、どちらも上流階級の方たちらしいから、かなり優雅な職業だけだな」

「日本のOLたちだって優雅な職業さ」

田島の肩越しに、トランクのまわりにたむろしてシーク教徒らしい赤いターバンの男と、何ごとか片言でやり合っては、笑いさざめいている女性たちに高木は目をやった。それから、にやっとして続ける。「ディスカバー・ジャパンはおるか、ディスカバー・ワールドも、最近じゃOLばかりのようじゃないか」

「ああ」

田島も振り返って苦笑した。「結婚までの腰かけですからね。ちょっと南の方へ行って来るわって出て来たのよ。そんなこと言ってる子がいやがったな」

「なるほどな」

そのとき、田島たちのグループの間に、汚れた赤い衣をまとったポーターが、五、六人、割って入り、添乗員てんそういんの指示を受けて、それぞれ二個ずつのトランクを反動つけて頭上に載せはじめた。

「あ、ちょっと待って下さい」

田島が言い、添乗員に走り寄ると、やがて、大声で高木に言った。「一緒に運ばせますよ。一人だとポーターなかなか来ないそうです」

「そうか。わるいな」

高木はトランクを彼らの近くに運び、あらためて、わるいな、と田島に言った。

「いいじゃない?」

ポーカーの仲間にも加わっていたOLのひとりが、度の入っているらしい薄茶のサングラス越しに笑いかけた。「旅はおたがいさまよ」

「たしかマイダン・パーク・ホテルでしたね?」

田島が言い、高木はうなずく。

「じゃ、ちょうどいいや。ぼくらはオペロイ・グランドっていうんですが、同じチョウリングー通りってところの近くだそうです。一緒のバスで行って下さい」

「いや、それは結構です。ぼくはタクシーで行きますから」

「いいですよ」

田島の隣から、添乗員が声をかけて来た。「どうぞ一緒に行ってください。この時間だとすごい混雑で、橋を渡るのもたいへんです」

2

たしかに恐るべき混雑だった。

トランクと荷降りし係のポーターの一人を屋根に乗せた貸切バスがスタートしたときは、彼ら若い連中は、ネオンがある、水銀燈がある、インドで初めてじゃないか、まるで東京だ、そんなふうに、さかんに騒ぎまわっていた。だが、数分後には、一同、すっかり黙りこくって、橋の上の雑踏を眺めるばかりになった。

牛車、人力車、国産車アンバサダーのタクシースの、ずんぐりした黄色い屋根、両側でうごめいている無数の群衆、宗教画で飾り立てた荷台のトラック、ひととき黒々とスペースを占拠している大型外車、それらのすべてが牛の歩みのようにじりつと前進しては、噴出する排気ガスの中に、永いあいだ停滞するのだ。

「ハウラー大橋か」

田島がガイド・ブックの地図をひらいて、高木に話しかけた。「これ一本しか橋がないんだなあ。……もう一本、このへんに橋かけりゃ、何てこたあないのにな」

「ああ」

高木は、どんよりとひろがるフーグリ河に目をやった。夜のとばりが降りようとしていたが、そのせいばかりでなく、はなはだしく視界はにごっていた。「スモッグもすごいな」

「こりゃあ峰さんもたいへんだ」

田島が言った。「いや、ぼくの大学の先輩で峰さんてひとが、この街にいますよ。就職のとき世話になったひとですがね。火力発電所関係の指導に来てるんです。もう二年になるかな？ ああ、デリーで発電所、見なかったですか？ あれも日本人が作ったんですよ。インドの近代化

には、ずいぶん、われわれも協力してゐるってわけだ」

「今度は、きみが橋をかけに来るしな」

「いや、いや。……そりゃ、まあ、来させてくれりゃあ来ますがね。とにかく、こっちの生活はすごいらしいんだから。峰さんなんか、四人も使用人使ってるらしいんですよ。妻子は残して来てるからチョンガーですがね。しかし、こんなひどい街とはちょっと……」

田島はふいに黙りこくりに、橋上の雑踏を眺めはじめた。バスはようやく、じりじりっと前進しはじめていたが、もう、およそ三十分近くは時が経っている。

「ま、近代化するのはこういうことさ」

高木が笑ったとき、ようやく前方の車や牛車の列が、向う岸の降り坂にむかつて、じりじりと滑り落ちはじめた。

ふっと、ため息をつき田島が背後の添乗員を振り返った。

「おどろいたな。いつも、こうなんですか？」

「いまラッシュですからね」

添乗員は言い、にやっと笑って続けた。

「ま、あと二、三分、待って下さい。今度はすいすい走りますから」

たしかに、そうだった。

大橋のたもとで右折すると、バスは、いきなりスピードをあげた。左右には、ほとんど灯のついていない官庁らしい建物が連なっていて、人通りもほとんどなかった。やがて、いきなり視界

がひろがり、広大な芝生、どっしりしたマホボディらしい大樹の並木、それらの間を疾走しはじめた。

「マイダン公園です。二キロ平方はありますね。サッカー場、動物園なんか入れると、その二倍はあります。イギリスがロンドンのハイド・パークに匹敵する公園を作ったんですよ。いま通って来た左側がエデン庭園でしてね。睡蓮すいれんの池がすばらしいです」

添乗員が、はずんだ声で言い、急に元気になったみたいと、まぜっ返したOLの声にバスの中には笑いが弾はじけた。

3

田島たちのグループが、大通りに面したオペロイ・グランド・ホテルに入ってから、高木はバスの後ろにまわり、しばらく煙草を吸っていた。

右側にマイダン公園がひろがり、前方にカルカッタの銀座であるチョウリングー大通りが商店の灯を路上にこぼして、一直線に延びていた。ひとつむこうのブロックにインド博物館があり、そのむこう、左側のパーク通り入口に、高木のホテルはあるはずだった。

のろのろとバスの屋根と舗道を往復しては、トランクを路上に並べている赤い衣の男に、やがて高木は声をかけた。

「おれの荷物は、ここでもらうよ」

トランクをかかえたまま、男はじつと高木を凝視して来た。インドに入ってから数知れず出会

った凝視だった。言葉がわからないわけではなかった。寸前まで英語でしゃべっていたホテル内アーケードの商人でも、ふっと会話がとぎれると、こういう凝視を送って来た。

愛想笑いのない国だな。

高木は思い、それから、ふと思い立って、ポケットから一ルピー札をつかみ出した。

「ダンナバード（ありがとう）」

高木が言い、手を出すと、男は無言のまま、軽く首を横にかしげ、トランクを手渡して来た。首をかしげるのは承諾のしるしだ。

高木はチョウリングー通りを歩きはじめた。

地図で見ると五百メートルもないようだったし、別れて来たグループの女性たちにくらべれば半分以下の荷物だった。だが途中で買いこんだ図鑑や書籍の類いのせいだ、羽田を立つ時にくらべれば、かなりの重量がふえていた。

ときおり高木は立ちどまり、トランクを置いて、軽く汗をぬぐった。

二度目の小休止から、高木のかたわらに女乞食がつきまとった。濃褐色の小さい顔に鋭い目だけが光っている小柄な女で、年齢は見当がつかない。だが、二十を越えてはたはいるようにはみえなかった。女は、やせ細った腕に、やはり目を光らせた乳児をかかえていて、模様が消え、ほとんど泥のような色彩にみえる木綿のサリーから、右腕を突き出し、おしだまったまま、高木について来た。

三度目の小休止で高木は女をはっきりと見返し、それから、